

ヘブライ語聖書研究

——社会科学批評によるアプローチ——

高橋 優子

ヘブライ語聖書研究の方法的な主流は、文献批判・様式批判・物語分析といった文学的なアプローチであるといつてよからう。それに対して「社会科学批評」という表現には比較的馴染みが薄い。しかし、近年、社会心理学を含む広義の社会科学的方法は、単なる社会層の区別と利害関係による説明以上のものを提供することができるようになっている。ここでは、主として社会的アイデンティティ理論・自己カテゴリー化理論を紹介しつつ、そのヘブライ語聖書研究への適用可能性を探ってみたい。

ヘブライ語聖書研究の社会学的伝統には、ウェーバーやマルクスのようなコンフリクト理論によるものと、デュルケムやコントに代表されるコンセンサス理論の伝統が存在する。前者は『古代ユダヤ教』の影響力の大きさからほぼ「ウェーバーの伝統」と考えることができる。私見によるとウェーバーの方法は、社会が理念を規定する方向と理念が社会を規定する方向のふたつを含んでいる点で思想上画期的であるが、両者の関係が必ずしも明らかではなく、そこに方法的な課題が残されていた。

現代社会心理学において重要なものと考えられる社会的アイ

デンティティ理論と、その発展形である自己カテゴリー化理論は、この課題に応えるものであるといえる。それは、この理論が、個人の心理過程と社会現象を統一的に把握することができからである。非常に単純化するならば、これは個人と社会の相互規定性を社会的アイデンティティ概念で媒介・説明するものである。

ところで、現代の「経験心理学」の知見を聖書研究に導入することには、いくつかもつともな懸念が存在する。それは、タISEンによれば、資料不足・テキスト科学的なナイーブさ・時代錯誤・還元論・陳腐さの「嫌疑」である。これらの制限については常に自覚的でなければならぬが、そもそもこれらの制限を持たない歴史研究というものはほとんど考えられない。したがって一次資料（テキストや考古資料）によつてその有効性をチェックされるならば、社会科学批評（ここでは社会的アイデンティティ理論・自己カテゴリー化理論といった社会心理学を援用すること）のモデル使用を否定する理由はない。

テスト・ケースとして紀元前七世紀後半のユダ王国におけるいわゆる申命記改革をとりあげるなら、第一に国家レベルの集団間関係を検討する必要がある。ユダ王国とアッシリア・バビロニア・エジプトとの関係である。その次にはユダ王国内での、元来の南ユダ国民と旧北イスラエル国民との関係、そして王・書記・祭司・自由農民・小家畜飼育者といった社会集団の内的・外的関係の検討が行われるだろう。実際ナショナル・アイデンティティ概念を用いた研究や、とくにアイデンティティ理論に言及してはいないが事実上旧両王国国民のアイデンティティ

第5部会

イと同化を対象とした研究が存在する。さらに社会集団あるいは社会層間の葛藤についての言及は多く見られる。また、申命記史家に注目して、彼らの社会的帰属を問う諸研究もある。しかし、これらはもっぱら外圧や利害関係から理解されており、それ自体間違っているのではないが、一面性を免れない。とくに自己（自集団）に不利益となることを自ら進んで行う場合、説明不能となる。

ここで社会的アイデンティティ理論・自己カテゴリー化理論を援用すると、利害に基づく自明な現象と利害に反する一見不合理な現象を統一的に説明することが可能となる。とくに紀元前七世紀後半に行われたと考えられる申命記改革は、古代的な強権によってのみなされたものではなく、利害のみからは理解しづらいケースが多いので、集団間関係と集団内関係をひとつのモデルで分析することができるこのアプローチに期待が持てる。

『啓蒙の弁証法』における反ユダヤ主義

内 藤 李 香

「反ユダヤ主義」は、決してドイツにおける一つの特異な現象ではない。アドルノ (Theodor W. Adorno, 1903-1969) が晩年に述べたこの見解には、「反ユダヤ主義」は単にある特定の人種や宗教の問題としてのみ捉えられるものではないことが

示唆されている。そしてこのようなアドルノの思考方法は、マックス・ホルクハイマー (Max Horkheimer, 1885-1973) とアドルノの共著である『啓蒙の弁証法』第5章に位置づけられている論文「反ユダヤ主義の諸要素—啓蒙の限界 (Elemente des Antisemitismus Grenzen der Aufklärung)」にその起源を見出すことができる。本発表では、「反ユダヤ主義」の起源として見出されうる、その本質的要素とはいったい何かという問いのもとに、同論文第1節から第4節に考察対象を絞ったうえで、以下にあげる三点が検討された。

(1) 「反ユダヤ主義」のもつ「盲目性」「志向喪失性」

ユダヤ人は、とりわけ近代以降「資本主義的」な生産形態を支えた。しかしながら、そうであるがゆえに、資本主義的形態下で経済的に「苦しむはめになった」一般民衆にとっては、逆にユダヤ人に対する嫌悪感を招いてしまったのである。ユダヤ人が優位を占めているような近代社会における経済政策によって助長された、経済的に「満足できない」人間にひそむ「ユダヤ人敵視」という「正しい認識に逆らった」、いわば「無意識的な」反応。そこに見出される、「盲目性」および「志向喪失性」が「反ユダヤ主義」の本質なのである。

(2) 「反ユダヤ主義」の本質的性格—「悪しき平等主義 (Gleichmacherei)」

(1)の議論なかでホルクハイマーとアドルノは、民衆レベルでの「反ユダヤ主義」に常に付きまとっている性格として「悪しき平等主義」という言葉を取り上げる。法の下では「平等」と言われ、「幸福」—ここでは「経済的所有」とそれに伴う